

外国人留学生の日本語表現の歩み-入学後2年間を中心に-

著者	伊藤 恵美子
雑誌名	東邦学誌
巻	44
号	1
ページ	43-62
発行年	2015-06-10
URL	http://doi.org/10.20728/00000370

外国人留学生の日本語学習の歩み
—入学後2年間を中心に—

伊 藤 恵美子

愛知東邦大学

外国人留学生の日本語学習の歩み —入学後2年間を中心に—

伊 藤 恵美子

目次

1. はじめに
2. 日本語の能力
 - 2-1. 日本語能力試験
 - 2-2. 実力テスト
3. 「東邦基礎」
4. 「日本事情」
5. 「総合演習」
 - 5-1. 授業の概要
 - 5-2. 校外学習
 - 5-3. ゼミナール交流会
6. 留学生支援制度
7. 考察
8. 今後の課題

1. はじめに

外国人が日本の大学に正規留学を認められる日本語能力の指標として筆頭に挙げられてきたのが、日本語能力試験1級合格である（日本語能力試験については第2章で説明する）。2010年に始まった現行試験ではN1レベル（上級）合格がそれに相当するとされている。留学生30万人計画や18歳人口減少の影響により、外国人留学生の受け入れを拡大する大学が増加している。留学生の入学枠拡大に加え、東日本大震災で日本留学を希望する外国人が減少したことから、入学基準が下がり、現在はN2レベル（中級）程度で合格できる大学も増えていると言われている。この流れを受けて、地方の小規模大学ではN3レベル（初級）にさえ達していない日本語能力の外国人大学生が実際に誕生している。他方、留学生指導者に共通する見解として、N1レベル合格者でも日本人学生と同等に大学の授業を受け、定期試験を受け、ゼミで議論するには日本語能力が足りないと言われていることを付言しておく。

かつて日本語学校や外国語専門学校や大学の付属施設（外国人留学生別科）等で養成されていた日本語能力を、各大学は外国人に入学を許可してから独自に教育する必要が生じ、外国語科目に外国人留学生向けの日本語科目を開講しているのが現状である。日本語は外国語科目の一つと

して設置されているので半期1単位の必修科目扱いで8単位、加えて一般的には日本事情や日本文化や異文化理解等の講義やプロジェクトワークが開講されている。外国語クラスは習熟度別に編成されるのが一般的なので¹、日本語のクラスは入門・初級・中級・上級に分けられ、留学生は入学時の日本語能力にあったクラスに配属される。さらに漢字・会話等の技能別のメニューも用意され、留学生は必要に応じて多様な授業を受けることができるような教育的配慮が施されている。他の学生に比して日本語能力が低い留学生は、通常の授業時間以外に行われる補習クラスにも出席が義務付けられる。また、留学生の学生生活をサポートするためにチューター制度も広く採用されている。課外学習としては、リアルな日本の理解を促進するために、伝統文化に触れられる京都や日光への観光・温泉・スキー等の幅広い教育プログラムも提供されている。

ところが、本学の卒業要件は外国語科目は4単位、つまり第二外国語を修める必要がないので、日本語もこれに準じると4単位になり、当然のことながら学習時間が絶対的に不足する事態を余儀なくされる。チューターによる勉学上のサポート制度もなく、リアルな日本文化に接するプログラムの準備もない。このように決して恵まれているとは言えない本学の教育環境で、2013年度入学生の2名が2014年度第2回（12月実施）日本語能力試験でN1レベルに合格した。合格した留学生は、どのように日本語能力を伸ばしていったのだろうか。2013年4月に入学した留学生が受講した日本語の関連科目を確認しながら、留学生の2年間の成長の足跡を検証したい。

2. 日本語の能力

2-1. 日本語能力試験

日本語能力試験は日本語を母語としない人の日本語の能力を測定して認定する試験で、世界最大規模の試験である。日本語能力試験は1984年から始まり、2010年以降は新試験が行われている。旧試験の1級、2級、3級、4級は、新試験のN1レベル、N2レベル、N4レベル、N5レベルに相当するとされている。新試験の認定の目安として、N1レベルは「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」つまり論理的な文章や講義が理解できるレベル、N2レベルは「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」つまり平易な文章や自然に近いスピードの会話が理解できるレベル、N3レベルはN1レベルとN2レベルの間に新設されたレベルで「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」つまり日常生活の具体的な文章や会話が理解できるレベル、N4レベルは「基本的な日本語を理解することができる」つまり基本的な語彙で書かれた身近な話題の文章やゆっくり話される会話を理解できるレベル、N5レベルは「基本的な日本語をある程度理解することができる」つまり日常生活の定型的な語句や身の回りの会話が理解できるレベル、とされている（国際交流基金・日本国際教育支援協会）。

大学の講義や演習では、日常的な場面での会話ではなく、幅広い話題について書かれた新聞の論説や評論、あるいは抽象度の高い文章を読んだり議論したりすることを通して新しい知識や概念が教授される。新試験のレベルで提示するなら、外国人が大学生として要求される日本語能力

は、十分条件ではないが必要条件としてN1レベルであることが理解されよう。

2-2. 実力テスト

毎年、留学生の初回授業で基本文型がどの程度定着しているかを確認するため、実力テストを実施している。実力テストの難易度は日本語能力試験2級に設定したので、正解率が60%以上なら2級合格、すなわち中級レベルに到達していると看做せる。

2012年度は5人、2013年度は12人、2014年度は6人に対して実力テストを行った。日本語の授業は主に1年次に入学した留学生が対象であるが、3年次への編入生と単位未取得の上級生も受講するので実力テストの対象にも含まれる。結果は、図1のとおりである。

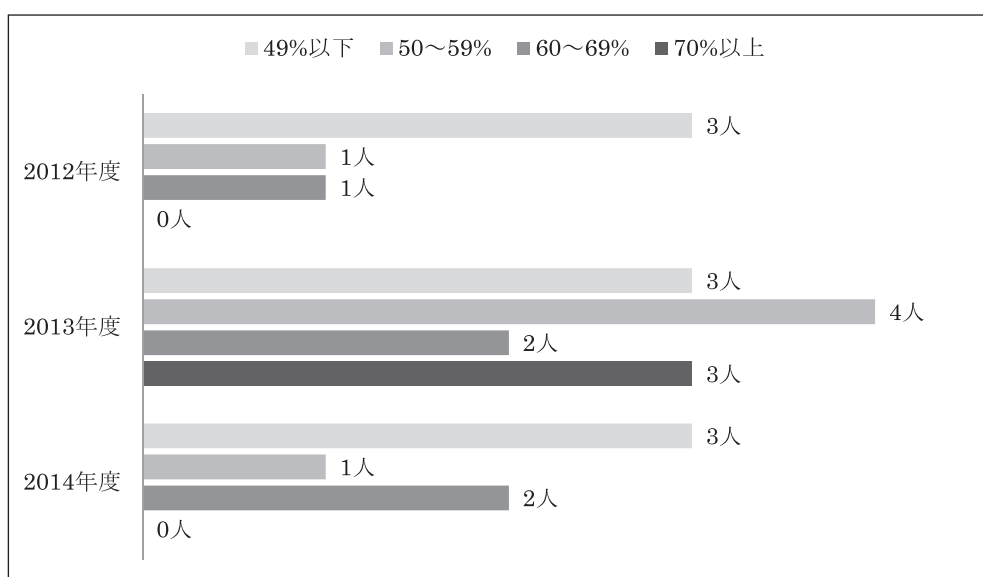


図1 実力テストの正解率

図1から読みとれるように、正解率が60%に達していない、つまり中級レベルに至らない（≡初級レベル）留学生は、2012年度は4人、2013年度は7人、2014年度は4人いる。つまり、初級レベルの留学生は、2012年度は80.0%、2013年度は58.3%、2014年度は66.7%と受講者の過半数を超えていることが、グラフ化すると図2・3・4のように明白になる。

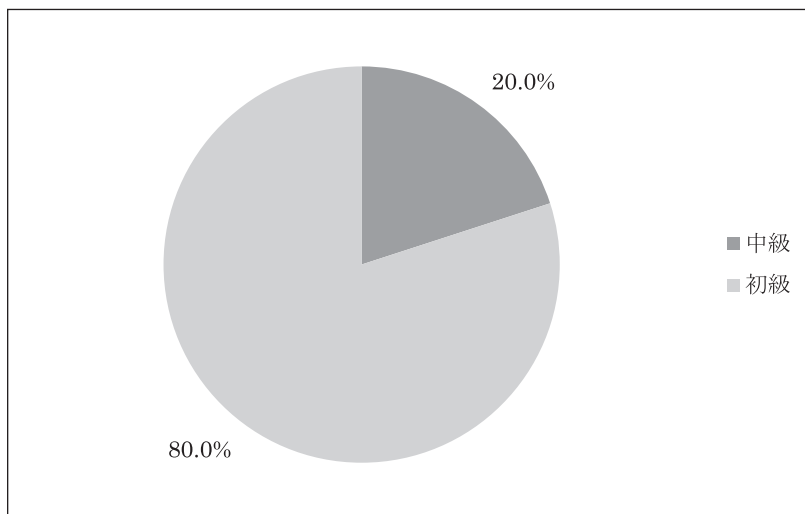


図2 2012年度クラスにおける中級と初級の割合

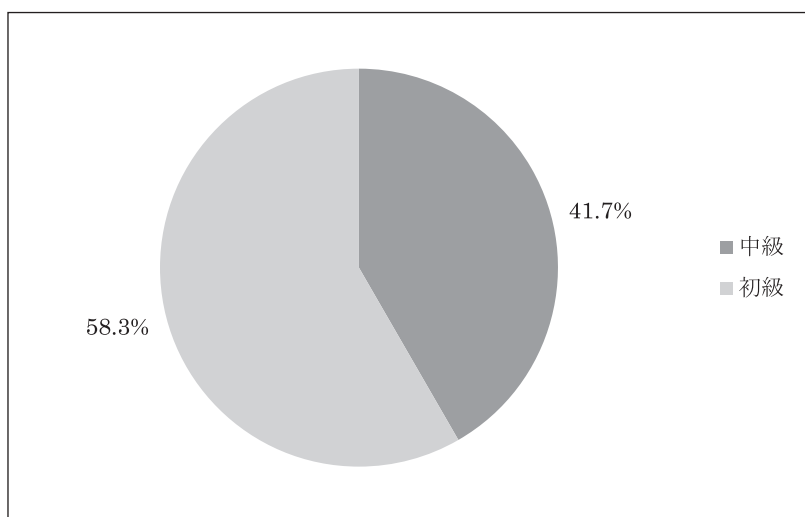


図3 2013年度クラスにおける中級と初級の割合

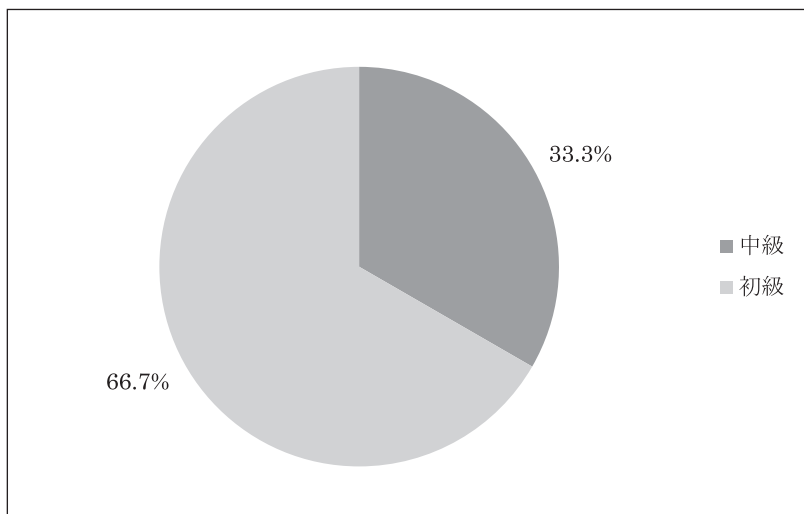


図4 2014年度クラスにおける中級と初級の割合

2013年度入学生で、2014年度第2回日本語能力試験でN1レベルに合格した1人（以下、Xとする）は実力テストの正解率が70%以上、もう1人（以下、Yとする）は正解率が60～69%以上に位置していた。XはN1レベルに近い実力、YはN2レベル程度の実力を、コース開始時に有していたと判断できる。

図1から分かるように、2013年度の実力テストで正解率が70%以上の留学生は3人なので、X以外に2人いた。ところが、この2人は残念ながら日本語能力試験N1レベルに合格していない。また、正解率が60～69%以上の留学生は2人なのでY以外に1人いたが、その留学生もN1レベルに合格していない。N1レベルに合格した留学生X・Yと合格に至らなかった留学生、この差はどこから生じたのだろうか。留学生向けに開講された授業を3～5章で紹介しながら²、明暗を分けた要因を分析していく。

3. 「東邦基礎」

「東邦基礎Ⅰ」「東邦基礎Ⅱ」は、東邦基礎力科目に位置する半期2単位の講義科目で、本学に入学した学生は全員修めなければならないとされていた。「東邦基礎」は2013年度入学生まで必修科目に担当されていたので、留学生も履修した³。前述のように本学の規程は外国語の履修単位が4単位なので、N1レベルに達しない日本語能力で入学する留学生の絶対的に不足する時間を補うために⁴、「東邦基礎」の1クラスを留学生専用とした⁵。

前期科目「東邦基礎Ⅰ」と後期科目「東邦基礎Ⅱ」は科目としては別立てであるが、テーマに共通性を持たせながら、「東邦基礎Ⅰ」から「東邦基礎Ⅱ」へ段階的に難易度が上がるようにした。注1に記したように、本学では習熟度別のクラス編成が行われていないので、留学生は入学時の日本語能力に関係なく全員同じクラスで勉強した。前期科目「東邦基礎Ⅰ」の概要を

『SYLLABUS 2013 経営学部地域ビジネス学科』から引く。

【授業の目的と概要】

大学での学修のうち基礎的素養となるのが「読解力」である。新聞などの身近なニュースなどを素材に日本語の基礎を復習しながら書かれた文章を理解し、利用し、熟考することを通じて「読解力」の基礎を築く。また成功体験を積み自己効力感を養う。

【各回の内容】

第1回：オリエンテーション（授業の進め方・評価等について説明）と自己紹介

第2回：はじめに イメージの日本・日本人

第3回：テーマ1 女性の生き方

第4回： //

第5回： //

第6回： //

第7回：発表1

第8回： //

第9回：テーマ2 子どもと教育

第10回： //

第11回： //

第12回： //

第13回：発表2

第14回： //

第15回：まとめ

【授業の到達目標】

大学での勉学に必要な能力のうち、主に読む能力を身につける。

多様な文章を読んで、現代社会に対する大学生としての問題意識を高める。

正確な日本語で意見がまとめられるようにする。

前期「東邦基礎Ⅰ」は、後期「東邦基礎Ⅱ」に連続する内容である。

【事前・事後学習】

テキストに沿って授業を進めていくので、予習をしてから授業に参加すること。

宿題や課題は決められた日に必ず提出すること。

辞書を持参すること。

【成績評価方法と評価基準】

定期試験（80％）と課題提出（20％）で評価する。

自主的努力を示すもの（授業への積極的な参加）があれば、追加加点（+α）する。

定期試験は記述式で、持込みは不可とする。

【テキスト（3冊まで）】

近藤安月子・丸山千歌（2008）『中・上級日本語教科書 日本への招待 第2版
テキスト』東京大学出版会

【参考図書（3冊まで）】

近藤安月子・丸山千歌（2008）『中・上級日本語教科書 日本への招待 第2版
予習シート・語彙・文型』東京大学出版会

次に、後期科目「東邦基礎Ⅱ」の概要を『SYLLABUS 2013 経営学部地域ビジネス学科』から引用する。

【授業の目的と概要】

大学での学修のうち基礎的素養となるのが「読解力」である。新聞などの身近なニュースなどを素材に日本語の基礎を復習しながら書かれた文章を理解し、利用し、熟考することを通じて「読解力」の基礎を築く。また成功体験を積み自己効力感を養う。

【各回の内容】

第1回：前期評価の説明と後期授業の進め方

第2回：テーマ4 仕事への意識

第3回： //

第4回： //

第5回： //

第6回： //

第7回： //

第8回：発表1

第9回：テーマ5 日本の外国人

第10回： //

第11回： //

第12回： //

第13回：発表2

第14回：多様化する日本・日本人

第15回：まとめ

【授業の到達目標】

大学での勉学に必要な能力のうち、主に読む能力を身につける。

多様な文章を読んで、現代社会に対する大学生としての問題意識を高める。

正確な日本語で意見がまとめられるようにする。

前期「東邦基礎Ⅰ」は、後期「東邦基礎Ⅱ」に連続する内容である。

【事前・事後学習】

テキストに沿って授業を進めていくので、予習をしてから授業に参加すること。

宿題や課題は決められた日に必ず提出すること。

辞書を持参すること。

【成績評価方法と評価基準】

定期試験（80％）と課題提出（20％）で評価する。

自主的努力を示すもの（授業への積極的な参加）があれば、追加加点（+α）する。

定期試験は記述式で、持込みは不可とする。

【テキスト（3冊まで）】

近藤安月子・丸山千歌（2008）『中・上級日本語教科書 日本への招待 第2版
テキスト』東京大学出版会

【参考図書（3冊まで）】

近藤安月子・丸山千歌（2008）『中・上級日本語教科書 日本への招待 第2版
予習シート・語彙・文型』東京大学出版会

授業の目的と概要から分かるように、「東邦基礎Ⅰ」「東邦基礎Ⅱ」は4技能のうち⁶、特に読解力の養成に焦点を当て、合わせて日本事情も学べるような教科書を使うことにした。読解力を重んじたのは、図書や資料などの印刷物から情報・知識を得ることが大学生にとって先ず必要な能力だからである。

4. 「日本事情」

2013年度入学生の外国語の必修科目名は「日本事情」であった⁷。「日本事情」は留学生に限定された科目である。「日本事情」は外国語科目なので半期1単位であるが、週2回の開講なので、

通年で4単位になる。注1に記したように、本学では習熟度別のクラス編成が行われていないので、留学生は入学時の日本語能力に関係なく全員同じクラスで勉強した。前期科目「日本事情Ⅰ」はプレゼンテーションができるようになること、後期科目「日本事情Ⅱ」は実際にレポートを書くことを授業目標にした。前期科目「日本事情Ⅰ」の概要を『SYLLABUS 2013 経営学部 地域ビジネス学科』から引用する。

【授業の目的と概要】

「日本事情Ⅰ」は外国人留学生の日本語力の向上を目指す。基礎的な日本語力を身につけて入学した留学生が大学で日本人学生と同等に勉学するのに必要な総合的な日本語力を、主にプレゼンテーションの側面から養成する。受講生は関心のあるテーマを探し、調査し、考察した内容をクラスで発表する。この過程を通して、情報収集、データ分析、口頭発表の能力を向上させる。

【各回の内容】

第1回：実力テストと文型の解説

第2回：オリエンテーション（授業の進め方・評価等について説明）と自己紹介

第3回：1 教育

第4回： 〃

第5回：発表1

第6回： 〃

第7回：2 ことば

第8回： 〃

第9回： 〃

第10回：発表2

第11回： 〃

第12回：3 コミュニケーション

第13回： 〃

第14回： 〃

第15回：発表3

第16回： 〃

第17回：4 昔話

第18回： 〃

第19回： 〃

第20回： 〃

第21回：発表4

- 第22回： 〃
- 第23回： 〃
- 第24回： 5 住宅
- 第25回： 〃
- 第26回： 〃
- 第27回： 発表 5
- 第28回： 〃
- 第29回： 〃
- 第30回： まとめ

【授業の到達目標】

大学での勉学に必要な情報収集とデータ分析ができるようになる。
データ分析の結果がプレゼンテーションできるようになる。

【事前・事後学習】

テキストに沿って授業を進めていくので、予習をしてから授業に参加すること。
宿題や課題は決められた日に必ず提出すること。辞書を持参すること。

【成績評価方法と評価基準】

定期試験（50％）と課題提出（50％）で評価する。
自主的努力を示すもの（授業への積極的な参加）があれば、追加加点（+ α ）する。
定期試験は記述式で、持込みは不可とする。

【テキスト（3冊まで）】

安藤節子・田口典子・佐々木薫・赤木浩文・鈴木孝恵（2001）『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 中級後期』スリーエーネットワーク

次に、後期科目「日本事情Ⅱ」の概要を『SYLLABUS 2013 経営学部地域ビジネス学科』から引用する。

【授業の目的と概要】

「日本事情Ⅱ」は外国人留学生の日本語力の向上を目指す。基礎的な日本語力を身につけて入学した留学生が大学で日本人学生と同等に勉学するのに必要な総合的な日本語力を、主にレポート作成の側面から養成する。受講生はまず作文とレポートや卒業論文のような客観的な文章の違いを知り、レポート等で使われる文体・文型が使える

ようになり、レポート等で必要な論理構成を理解してから、実際にレポートを作成する。関心のあるテーマを探し、調査し、考察した内容をレポートにまとめる過程を通して、情報収集、データ分析、文章表現の能力を向上させる。

【各回の内容】

- 第1回：前期評価の説明と後期授業の進め方
- 第2回：レポートに使われる文体
- 第3回：文の基本
- 第4回：句読点の打ち方・記号の使い方
- 第5回：引用の仕方
- 第6回：まとめ（1）
- 第7回：段落
- 第8回：仕組みの説明
- 第9回：歴史的な経過の説明
- 第10回：まとめ（2）
- 第11回：分類
- 第12回：定義
- 第13回：要約
- 第14回：比較・対照
- 第15回：因果関係
- 第16回：まとめ（3）
- 第17回：論説文
- 第18回：資料の利用
- 第19回：レポート作成の仕方
- 第20回：まとめ（4）
- 第21回：テーマ決定→資料の収集
- 第22回：レポートの構想発表
- 第23回：レポートの執筆（1）
- 第24回：レポートの執筆（2）
- 第25回：レポートの提出
- 第26回：レポートの返却→レポートの修正
- 第27回：レポートの修正
- 第28回：〃
- 第29回：清書レポートの提出
- 第30回：全体のまとめ

【授業の到達目標】

大学での勉学に必要な情報収集とデータ分析ができるようになる。
データ分析の結果を考察して文章にまとめられるようになる。

【事前・事後学習】

テキストに沿って授業を進めていくので、予習をしてから授業に参加すること。
宿題や課題は決められた日に必ず提出すること。辞書を持参すること。

【成績評価方法と評価基準】

定期試験（40％）とレポート（40％）と課題提出（20％）で評価する。
自主的努力を示すもの（授業への積極的な参加）があれば、追加加点（+ α ）する。
参考文献の引き写しやインターネットの貼り付けによるものは、レポートとして評価しない。

【テキスト（3冊まで）】

二通信子・佐藤不二子（2003）『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』
スリーエーネットワーク

5. 「総合演習」

5-1. 授業の概要

「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」は東邦基礎力科目の一つで、2年次に配当される半期2単位の演習科目である⁸。すでに説明したように、本学の規程は外国語の履修単位が4単位なので、日本語学習に足りない時間を補うために、「総合演習」は主な受講者に留学生を想定し開講している⁹。「総合演習Ⅰ」の概要を『SYLLABUS 2014 経営学部地域ビジネス学科』から引用する。

【テーマ】

「日本語観察」から「日本語表現」へ

【ゼミ概要（内容、目的）】

このゼミは、日本の文化や社会について知識を増やし、日本語をより効果的に使いたいと願っている意欲的な外国人留学生を主な対象とする。毎回のゼミで、現在使われている日本語を観察して、それぞれのことばの背景にある人間関係や社会構造などを考える。ゼミ生は各自が選んだ課題について、どのように現実社会で使われているか注意深く観察し、図書館で本を読んで考察したことを、教室で発表し、意見を交換した後、レポートにまとめる。この過程で、口頭表現と文章表現の能力を養う。

【各回の内容】

第1回：自己紹介

第2回：オリエンテーション（授業の進め方・評価等）と図書館の使い方

第3回：レポートの書き方 1

第4回：レポートの書き方 2

第5回：担当者の発表<テーマ1>

第6回：〃

第7回：担当者の発表<テーマ2>

第8回：〃

第9回：担当者の発表<テーマ3>

第10回：〃

第11回：担当者の発表<テーマ4>

第12回：〃

第13回：学外授業

第14回：レポートの提出→レポートの修正

第15回：清書レポートの提出

【ゼミ運営（ゼミの進め方）】

初回はゼミの進め方を説明する。2回目以降は担当の学生が観察・考察したことばについてプレゼンテーションを行い、ゼミ生は全員が必ず発表に対して意見を述べる。発表した内容は、最終的にレポートにまとめて提出する。

前期「総合演習Ⅰ」は、後期「総合演習Ⅱ」に連続する。

【学習上の留意点（授業を受けるにあたっての心構えなど）】

討論への参加を出席と看做す。

【テキスト・参考図書（著者名、書名、出版社名）】

教科書は使用しないが、印刷物を適宜配布する。

【成績評価を含めた担当者からのメッセージ】

発表（30%）と課題提出（40%）と授業への貢献度（30%）で評価する。

後期科目「総合演習Ⅱ」の授業も前期科目「総合演習Ⅰ」と基本的には同じように進めるため、「総合演習Ⅱ」のシラバスは省略する。

5-2. 校外学習

IT (Information Technology) の発達によりインターネットから入手できる情報は格段に増え、留学生の日本に対する知識も以前と比べられないほど増加しているが、実際に見たり触れたりする機会は限られている。そのため、第1章で述べたように、留学生にリアルな日本の文化や社会を理解させるために、伝統文化が現存する京都や高山や日光等への観光のほか、雪の降らない地域からの留学生にはスキー体験等の幅広い教育プログラムを課外学習や研修旅行として提供する大学が多い。

しかし、本学には留学生の見聞を広げる研修予算がなく、着任した2012年度は名古屋市内の大学に通っているのに名古屋城さえ行ったことのない留学生がいた。それで、「総合演習」の校外学習として、前期と後期の授業に見学を1回ずつ組み入れ、日本の伝統文化と先端科学技術の双方が理解できるようにコースデザインした。訪問先は、(1) 前期・後期の授業期間に1回、(2) 日本の伝統文化と先端科学技術が学べる所、を前提に留学生の希望を尊重し全員一致で決定している。参考として、過去3年間の訪問先を表1に示す。

表1 校外学習の実施場所

	前 期	後 期
2012年度	名古屋城	名古屋海洋博物館・名古屋港水族館
2013年度	徳川美術館・徳川園	トヨタ産業技術記念館
2014年度	名古屋市科学館	神宮（皇大神宮）

2014年度は、前期は南海トラフ大地震を心配する留学生や日本の科学技術に関心を持つ留学生がいたので名古屋市科学館に、後期は2013年に第62回式年遷宮が行われた神宮を見たいと強い希望があったので伊勢に出掛けた。

5-3. ゼミナール交流会

後期授業期間の終盤に「総合演習」はゼミナール交流会（以下、交流会とする）を有志のゼミだけではあるが、開催している。交流会で他のゼミの学生や先生方に勉強したことを発表するのは良い経験になるので、「総合演習」を担当した2012年度から留学生に積極的な参加を促している。過去3年間に発表したテーマは、表2のとおりである。

表2 発表のテーマ

2012年度	ら抜きことば
2013年度	授受動詞
2014年度	伊勢神宮

2012年度と2013年度は、ゼミで討論したテーマから一つ選定し、全員で発表原稿をパワーポイントにまとめて発表した。2014年度は、校外学習で訪れた伊勢神宮について自分たちで調べて理解したことを中心に感想も交えて発表した。

6. 留学生支援制度

留学生に対して講じられている経済的な支援制度で、本学の留学生が過去に与った奨学金は、文部科学省外国人留学生学習奨励費（48,000円/月）、公益財団法人市原国際奨学財団外国人留学生奨学金（50,000円/月）、学内では私費外国人留学生特別奨励金（Ⅰ種A奨励金100,000円、Ⅰ種B奨励金50,000円、Ⅱ種奨励金50,000円）、就業力マイスター奨学金（A奨学金200,000円、B奨学金100,000円）が挙げられる。

文部科学省外国人留学生学習奨励費は、在学生の中からGPA（Grade Point Average）の高い学生が学内で1人選抜され、文部科学省で審査されて受給者が決定する。公益財団法人市原国際奨学財団外国人留学生奨学金は、他の奨学金との重複受給や財団の趣旨やGPA等を考慮して応募者の中から学内選抜で1人推薦し、財団の審査に通れば奨学生として支給される。

学内の制度には、私費外国人留学生特別奨励金と就業力マイスター奨学金がある。2012年度に留学生に対する経済的援助として私費外国人留学生特別奨励金規程が制定され、2013年度入学生から適用されている。私費外国人留学生特別奨励金は、Ⅰ種A奨励金・Ⅰ種B奨励金・Ⅱ種奨励金に分けられる。Ⅰ種A奨励金は入学前年度に受験した日本留学試験が日本語300点以上で記述35点以上だった者、または日本語能力試験N1レベル合格者、Ⅰ種B奨励金は入学前年度に受験した日本留学試験が日本語240点以上で記述30点以上だった者、または日本語能力試験N2レベル合格者、Ⅱ種奨励金は入学後に受験した日本語能力試験N1レベル合格者が該当し、本人の申請に基づいて支給される。

就業力マイスター奨学金はGPAに基づく成績重視の制度ではなく、自己目標を設定して1年間前向きに活動し成長した学生が日本人・外国人の別なく選ばれ、年度初めのガイダンスで表彰とともに支給される。A奨学金とB奨学金の別があり、より就業力がアップした学生にA奨学金が支給される。

表3は、2013年度入学生の奨学金受給状況を一覧にまとめたものである。2013年度の新入生は8人なので¹⁰、X・Y以外の6人に対してA・B・C・D・E・Fと記号を振る。

表3 2013年度入学生奨学金受給状況

	学習奨励費	市原奨学金	I種A	I種B	II種	マイスターA	マイスターB
X	○			○	○	○	
Y				○	○		○
A				○			
B				○			
C		○		○			○
D						○	
E				○			
F							

表3から、私費外国人留学生特別奨励金I種A奨励金を受給した学生は皆無であること、最多の4種類の奨学金を受給したのはXであること、3種類の奨学金を受給したのはY・Cであること、1種類の奨学金を受給したのはA・B・D・Eであることが分かる。学内で唯一人推薦される文部科学省外国人留学生学習奨励費を受け、就業力マイスターA奨学金も獲得したXは、学業優秀で前向きに努力を続ける模範的な学生であると判断できる。同じく就業力マイスターA奨学金を支給されたDも、本学が表彰に値すると判断した学生である。Cは、GPAでXに及ばず文部科学省外国人留学生学習奨励費を受けられなかったものの、公益財団法人市原国際奨学財団から外国人留学生奨学金を受給し、就業力マイスターB奨学生に選ばれている。YはGPAでX、Cの後塵を拝しているが、私費外国人留学生特別奨励金I種B奨励金・II種奨励金、就業力マイスターB奨学金と学内の奨学金をもれなく受給している。

奨学金の受給状況を詳しく見ていけば、X・Y・C・Dは入学時点で日本語能力に大きな差はなかったこと、いずれも奨学金を支給して大学生生活を応援してやりたいと評価を受けた留学生であることが理解される。では、どうしてX・YはN1レベルに合格し、C・DはN1レベルに至らなかったのか。次章で、この疑問について考えたい。

7. 考察

ある教育方法が効果的であると論証する場合、その教育方法を受けた学生と受けなかった学生の成績をクラス単位で比較実験するのが一般的である。科学的な比較分析は、国際的な学術雑誌のレビューのパスに欠かせない¹¹。しかし、このような実験は分析対象が物質であれば問題ないが、人であったらどうだろう。倫理的に許されるのだろうか。教育者の経験知から、ある教育方法が他の教育方法より効果的であると予想されるなら、全ての学生の成績を向上させるために、全学生に効果的な方法を平等に用いるべきではないか。このように常に考えてきたので、今まで教育方法に関して統制群による実験は行ったことがない。しかし、経営学部執行部の方針変更によって¹²、2014年度「総合演習」は、日本語能力向上という教育的見地より、留学生の個人的意

向が優先するようになったので、図らずも教育方法の実験を実施するようなことになった。

図1に戻ろう。2013年度の実力テストで正解率が70%以上の留学生は3人いた。日本語能力試験N1レベルに合格したXと、合格に至らなかった2人である。この2人は、C・Dであった。実力テストで正解率が60～69%以上の留学生は2人いた。日本語能力試験N1レベルに合格したYと、合格に至らなかった1人である。この1人はEであった。

2014年度に<「日本語観察」から「日本語表現」へ>をテーマとする「総合演習」を選択した留学生は4人であった。4人の中にXとYがいた。この「総合演習」は、日本の文化や社会について知識を増やし、日本語をより効果的に使いたいと願っている意欲的な留学生を対象にした。毎週、現在使われている日本語を観察して、それぞれのことばの背景にある人間関係や社会構造などを考えた。ゼミ生は自分で選んだ課題について、どのように現実の日本社会でことばが使われているかを注意深く観察し、図書館で本を読んで、考察したことを教室で発表し、意見を交換した後、レポートにまとめた。これを1年間継続した。

必修科目扱いの「東邦基礎」「日本事情」は、2013年度入学生は全員履修している。学生間で日本語関係の履修科目に違いがあったのは、「総合演習」の選択だけである。N1レベルに合格した留学生と合格に至らなかった留学生の差は、「総合演習」でことばの背景まで掘り下げて考え、学外の大規模図書館まで足を運んで資料を自分で探して丹念に読み、他言語との比較や過去から現代に至る日本語の変遷をゼミで議論する過程で裏付けられた日本語能力の差である。それは、テクニカルな試験対策とは本質的に異なり、大学生として自律的に学ぶ知のあり方から結実したものである。

最後に、留学生が「総合演習」についてのアンケートで綴った自由記述を記す¹³。不正確な表記が散見されるが、実名の書き換え以外はそのまま転記する。

この授業を聞いて色々な日本のことについてレポートを書いた。最初は私が日本のことについてレポートを書けるのか？心配もあったが先生のおかげでレポートの書き方や調べる能力がうまくなってよくレポートを書けるようになった。先生のおかげだけではなく一緒に勉強して、役に立ってくれた〇〇さん、××さん、△△さんにも色々なことを聞いて本当に感謝する。2014年伊藤先生の授業を聞いて本当によかったと思う。

この授業はほかの演習より楽な授業じゃないけど、自身の語力とか、日本語の理解度にとって、いい授業だと思う。みんなは伊藤先生が厳しいと言れた。この一年間で先生と勉強して、先生が優しく、こどもらしいな先生だと思った。先生はみんなが知らない一面があるから、僕がいい先生と思った。今度にチャンスがあれば、また、先生と一緒に頑張りたい。

今まで、伊藤先生の授業を受けている私たち四人以外の他の留学生は伊藤先生の厳し

さに恐しくて、他のゼミに行っているが、私は「彼たちが大間違いでした」と言いと思っています。なぜかという、伊藤先生はやさしくどんなこと、どんな時でも親切に聞いてくれて、アドバイスしてくれて本当に助かりました。

授業の内容には、留学生の日本語力の向上に役に立つと思っている。これは現在日本語力が良くない私たちにとって必要な授業だと私はずっとそう思っています。自分が調べたことを自分の言葉で書いてまた発表することも良い練習だと思っています。残念なのは専門演習が先生のゼミに属することができないことだ。これから先生の授業を受ける機会が少なくなりますが、なんかありましたら、先生の所に相談に行きたいです。よろしくをお願いします。

大学に入って、伊藤先生の授業を受け始めました。こちらの学校に入ったばかりの時にとても不安でしたが、伊藤先生が優しく、いつもにこにこに日本文化や、日本語や、日本のマナーなどを教えてくれました。とても感謝します。日本語をもっと上手になりたいので、2年生の時に伊藤先生のゼミに入った。総合演習の一年中に5つのレポートを書きました。レポートを書く時が大変でしたが、とてもいい勉強になりました。今はレポートを書けますし、とても感謝します。この2年間とても楽しかった。一生も忘れません。

1年次の日本語の授業を受けて2年次の授業も楽な授業でないだろうと予想したが、自分自身の日本語能力の不足を認識し向上させたいと考えた留学生は、難しいと思われる「日本語観察」から「日本語表現」へがテーマの「総合演習」をあえて選んだ。そして、プレゼンテーションとレポート作成に代表される大学生らしい知の営みを経て、どの学生も1年前より日本語能力が高くなったことを自覚している。

8. 今後の課題

初回の日本語授業で、筆者が毎年留学生に話すことがある。それは、「授業期間中はアルバイトをできる限り減らして、大学の授業が中心の生活をする。一生懸命勉強して、良い成績が取れば、学費は半減してもらえ、奨学金ももらえます。単位が少ししか取れない学生は、学費免除してもらえません。奨学金は日本人学生は普通返さなければなりません、留学生は返還しなくてもいいです。奨学金は日本政府からももらえるものもあるし、財団からももらえるものもあるし、大学からももらえるものもあります。マイスター奨学金は、愛知東邦大学独自の奨学金です。マイスター奨学金は、自分で目標を決めて、どのように頑張ったかを記録して入力することが必要です。マイスター奨学金は、成績だけで決まるわけではないので、頑張った人はもらえます。愛知東邦大学の学生しかもらえないマイスター奨学金を、ぜひもらってください。奨学金がもらえれば、アルバイトはたくさんしなくても生活できます。アルバイト時間が短くなれば、勉強時間

が増えて成績も良くなります。大学は日本語学校よりも夏休みも春休みも長くて約2か月あります。夏休み・春休みは自由に過ごしてもいいです。日本国内の旅行もいいし、外国旅行もいいし、帰国しても大丈夫です。だから、まずは勉強を頑張ってください。」という内容である。近年は親元から学費を送金してもらって留学生も増えているが、自力で頑張っている留学生のほうがまだ多い。奨学金が受給できれば、アルバイト時間を減らせるので、勉強時間が確保できるだけでなく、趣味やボランティア活動等大学生らしい活動をする余裕も生まれる。そのためには、勉強中心の生活習慣の重要性を理解させ、留学生が勉強を中心に据える生活を自ら始めるような指導が必要になる。その大学における勉強に日本語能力は必須である。

ところが、2014年度は非漢字圏出身初級レベルの留学生が多く入学し、基本的な語彙・漢字・文型の定着率が非常に低い。漢字圏の出身者なら漢字で示せば簡体字・繁体字の違いはあっても中心的な意味合いは通じるが、非漢字圏出身にはそれを望めない。また、日本と同じ社会体制から来日した学生なら幼少のころから馴染んでいる常識として理解できることが、体制を異にする地域からの留学生には理解が及ばないこともある。初級レベルの留学生に関して、より深刻なことは基礎語彙と基本文型を使って話しても情報が正確に伝わらないことである¹⁴。

2014年度外国人留学生支援に関して、学生委員会が「夏休みに特別に授業担当者が補習授業を行ったが、全員が毎回出席したわけではなく、学習上の問題がある。日本語力が低いため基本的な事務連絡も難しく、上述の事故（火傷）にも繋がってしまったのではないかと思われる。」と総括しているように¹⁵、留学生受け入れに対して入試委員会・教務委員会を中心に教学全体における真摯な検討が喫緊の課題である。受け入れ後の教育についても、留学生にとって大学生活の根幹を成す日本語能力が向上する機会を未熟な留学生が自ら放棄することがないように、大学としていかに教育システムを構築するかという課題に取り組まなければならない。

謝辞

本稿を執筆するに際し、愛知東邦大学学生課浦雪氏に留学生基本データの確認でご協力を頂きました。ここに記して謝意を表します。

注

1. 教務委員によれば、以前は本学でも英語を習熟度別でクラス編成していたらしいが、近年、筆者が着任した2012年度以降は、理由は不明のようだが、実施されていない。
2. 言うまでもなくXもYも授業外に自習していたが、筆者が自習を全て把握することは不可能なので、本稿では正規の授業のみを対象にする。
3. 2014年度に教育学部が新設され、それに伴うカリキュラム変更により、科目名が「日本語」に変更された。
4. 筆者が指導した留学生の中には、N1レベルどころかN2レベルにも程遠くN3レベルも疑問に感じられる外国人が入学を許可されており、底上げの時間が不可欠である。
5. 2012年度に本学に赴任するにあたり、他大学の日本語関連科目の開講状況に鑑み「東邦基礎Ⅰ」「東邦基礎Ⅱ」を留学生向けに1クラス開講し日本語教育を行うことを成田良一学長と協議、決定した。

6. 4技能は、読む、書く、聞く、話す、を指す。
7. 「東邦基礎」と同様に、教育学部新設に伴うカリキュラム変更によって2014年度から科目名が「日本語」に変更された。
8. 本学では、1年次に「基礎演習」、2年次に「総合演習」、3・4年次に「専門演習」が開講されており、学生は在学中どこかの演習に属することになっている。
9. 「東邦基礎Ⅰ」「東邦基礎Ⅱ」と同様に「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」も、留学生を対象に開講して日本語能力の向上を目指すことを成田良一学長と協議、決定した。これを受けて2012～2013年度は、留学生は全員日本語能力向上を目指す<「日本語観察」から「日本語表現」へ>がテーマの「総合演習」を履修した。しかし、経営学部執行部は2014年度に留学生も日本人学生と同じようにどの演習を選んでよいと方針を変更した（注12を参照されたい）。
10. 本稿は1年次入学生の日本語能力の伸びについて論じているので、3年次編入生はここでは除く。
11. 筆者は言語系・言語教育系の国際学会で査読委員を務めているが、査読の重要なポイントはデータの科学性にある。
12. 経営学部執行部から、経営学部教員の減数等の理由で日本人学生も演習に受け入れるよう筆者に強い要請があり、頭割りで学生が配分されることになった。同時に、留学生の「総合演習」選びも自由に任せることになった。2014年度初回授業に初対面の日本人学生も部屋に現れ、事の詳細は知らされていないが、2週目から日本人学生は他のゼミに配属変更されるということがあった。ゼミ教育の内容を考慮せず、教員の負担を平均化するという皮相的な発想は教育機関として適切な判断なのか。また、教学の長が全学的な方針として定めたことを一学部の執行部が突然変更するのはガバナンスの点でも疑義が生じるが、本稿の趣旨から外れるのでこれ以上の議論はしない。留学生向けの「総合演習」を開講しなくなれば、今後、留学生の日本語教育をどう担保するかが大きな課題として残される。
13. 本学では、演習は学生による授業評価の対象科目ではないので、翌年の授業改善に繋げるため受講生の意見を聞くことにしている。アンケートは選択式と感想を書く記述式から成り、匿名で行った。
14. 本学には中国人の職員は配置されているが、中国語以外の留学生の母語を理解する職員は配置されていない。
15. 大学祭に、留学生は1年生主催の模擬店と2年生主催の模擬店を通して参加した。上述の事故は1年生が調理中に火傷を負ったことを指す。

参考文献

- 愛知東邦大学. 2013. 『SYLLABUS 2013 経営学部地域ビジネス学科』
 愛知東邦大学. 2014. 『SYLLABUS 2014 経営学部地域ビジネス学科』
 愛知東邦大学. 2015. 「2014年度学生委員会総括」
 国際交流基金・日本国際教育支援協会「日本語能力試験」
<https://www.jlpt.jp/abput/levelsummary.html> (2015年3月14日参照)

受理日 平成27年3月31日